

小説の技

—ゾラ『プlassen征服』（1874）の連載版と初版から¹—

宮川 朗子

【キーワード】 エミール・ゾラ、『プlassen征服』、連載小説、文体

はじめに

『プlassen征服』は、『ルーゴン＝マッカール叢書』中で最も読まれていない作品としてしばしば紹介される小説である。この不人気の原因としては、この小説の主要な題材が既にそれ以前の作品でも扱われているということが考えられる。つまり、プlassenという架空の地方都市を描いた物語としては、この叢書第1巻の『ルーゴン家の運命』（1871）があり、神経症という題材は、『テレーズ・ラカン』（1867）の主題とも似ているからだ。それゆえに、『プlassen征服』は、新鮮味を欠くような印象を与えたのかもしれないのだが、この小説が発表された時、フロベールやアナトール・フランス、さらにはゾラの大敵フェルディナン・ブリュヌチエールまでもが、地方政治や人間の情念をありのままに書いたこの小説の生々しさやその文体を評価していた。この時代を代表するこれらの文学者たちからの好評は、『プlassen征服』が正統的な価値を持つ文学として認められていることを例証するが、この小説は、その時代のほぼすべての長編小説同様、当初、新聞に連載で発表されたものであり、この一般大衆向けの発表形態自体、ゾラ自身が嫌悪するものであった²。そのせいか、『プlassen征服』初版の出版の際、ゾラは連載版を修正し、この小説の文体を大きく変えている。この点については、この小説のプレイアド版の解説で指摘されてはいたものの³、具体的にはほとんど検討されてこなかった⁴。

そこで、『プlassen征服』と同じ題材をとり、同じ媒体で発表された『ルーゴン家の運命』と比べることで、その文体の大まかな特徴を把握するとともに、この小説の連載版と初版の異同を確認することにより、『プlassen征服』を文体面から再評価することを試みたい。さらに、この小説の文体には、検閲の問題も関わってくるように思われるが、この点については、草稿との照合によって、この仮説を裏付けることを試みる。

I. 『ルーゴン家の運命』と『プlassen征服』そして『シエクル』紙

『ルーゴン家の運命』の連載版と初版とを比べてまず目にとまるのは、連載版と比べ、初版の段落数が大幅に減っていることだ。このことについてすでに我々は、初版への校正原稿中の段落をつなげる指示がゾラ自身によるものであり、その数は230箇所以上に及ぶことを確認した⁵。一段落が短いことは、読みやすさを肝要とする連載という形式が要求するものではあるが、思想を芸術的に表現するには向かないものであると、この作家自身は考えていた⁶。また、連載の切れ目は編集者によって決定されることや、『シエクル』紙というその時代屈指の全国紙に長編小説を発表することは、ゾラ自身初めてだったことから、連載版では一段落の長さを短くしてある程度許容できる切れ目を準備し、書籍版出版の際には、段落をつなげることで連載の痕跡を消そうとしたと考えられる。実際、一つの段落の行数は、『ルーゴン家の運命』の連載版においては平均8,9行であり、まさに、連載小説が要求する（とはいえ悪しき）条件としてこの作家が考えていた10行以内に収めているのである。

これに対して『プlassen征服』は、連載版と初版とで段落数の違いはほとんどない。『ルーゴン家の運命』と同じ新聞に発表されたこの小説の連載版は、一段落平均12,3行で構成されているゆえ、確かにこちらの方が数字の上では段落が長い。とはいえ、『ルーゴン家の運命』と比べて、それほど段落の長さの差は気にならず、むしろ読者は『ルーゴン家の運命』と比べて読みやすいという印象さえ抱くかもしれない。このことは、『ルーゴン家の運命』を読んだ者にとっては馴染みの人物や場所が登場すること、そして、『プlassen征服』の手法として最も目立つ直接話法の多さに起因するようと思われる。直接話法、よりの的を絞るなら対話によって物語が進められることは、しばしば大衆小説に対してなされた一般的な批判であるが、ゾラのこの小説については、フロベールがその多さを難点としている⁷。ただ、この手法が、テキストを読みやすくするためには有効であり、登場人物の間で会話が交わされている間、語りはその背後に退くため、読者を登場人物に近づけ、あたかも人物間で交わされる対話にリアルタイムで居合わせているような錯覚を抱かせるゆえに、大衆小説には好んで使われていることは、ダニエル・クエニャが指摘している⁸。

『プlassen征服』は、文学の正統的な価値がある作品群として認められることを企図した『ルーゴン＝マッカール叢書』を構成する作品であるが、この小説の連載版を初版の出版にむけて修正する際、ゾラが対話の大幅な削除や書き換えをしなかったのは、それゆえ理解しがたく思われるだろう。しかし、対話の多さは、地方政治というこの小説の題材の一つが原因とも考えられる。確かに地方政治は『ルーゴン家の運命』においても主要な題材であるが、この『ルーゴン＝マッカール叢書』第一巻は、帝政成立時に起ったヴァール県での共和派の蜂起とその鎮圧という歴史的イベントが大きな着想源であり、物語にもそれが生かされているのに対し、『プlassen征服

服』の方は、具体的な史実に基づいたものではなく、第二帝政の政治的安定を図って為政者たちがいかにもやりそうに思われたことを描いたものである。この小説において、帝政の中樞を担う大臣から、地方都市の帝政への従属を強化するよう命を受けたフォジャスは、プランスサンの人々から受け入れられ、慕われ、最終的には対立する政治勢力を融和させ、まとめて帝政に仕えさせるために、町の有力者のサロンや教会に集まる女性たちの間で交わされる噂話を利用するのだが、それゆえ、必然的に、直接話法で書かれる部分が多くなっていると考えられる。このことは、当時の地方政治を動かすやり方を参照させているとも解釈できるが、同時に、第二帝政を担う地方の有力者の政治的信条の希薄さや無責任さが、無駄なおしゃべりや悪口、噂話を、量的に幅をきかせることで批判的に表現されているともいえよう。直接話法という手法は、この小説においては、単に読みやすさへの配慮だけではなく、批判の機能も担っている。

II. 対称性とリズム

『プランスサン征服』の連載版において最も目立つ文体上の特徴は、接続詞 *et* の多用である。この語は、その前後の関係を強めるのみならず、繰り返されることによってある種のリズムも生み出している。しかし、初版において、その多くが句読点や他の語へ変更され、その数は150箇所以上にも及んでいる。中でも多いのが、句読点への変更である。

連載版

a-1. Alors il rentra, fureta dans la salle à manger, et, comme Marthe lui demandait ce qu'il cherchait ainsi, il devint furieux; [...] (3月5日1面)

b-1. Elle s'était assise, plaisantant et souriant. (4月2日1面)

初版

a-2. Alors il rentra, fureta dans la salle à manger. Comme Marthe lui demandait ce qu'il cherchait ainsi, il devint furieux, [...] (60)

b-2. Elle s'était assise, plaisantant, souriant. (200)

a-2は、a-1の *et* を削除することによって文を分け、一文を短くしている例である。このような例は、枚挙に遑がなく、それは、文体を簡潔にする大きな要因と考えられる。この時、文体の簡潔さは、連載が求める読みやすさとは関連性がうすいという仮説が立てられるが、この問題については、他の論文で触れる予定である⁹。一方、b-2では、b-1の *plaisantant* と *souriant* の対称

をなす関係は、et を読点に置き換えることによって列挙される形になる。また、この削除によってリズムも変化するが、ゾラは、連載において全体的に et で取っていた文の調子を、初版においては読点で取っているようだ。このことは、この小説の前半ですでに30カ所以上に読点に加筆されていることから認められる。

初版

- c. [...] tandis que, devant elles, le jardin, déjà dans une ombre grise, s'endormait. Pas un bruit, au dehors, ne montait de ce coin désert de la ville. (1-2 最初と最後の二つ、計四つの読点に加筆)
- d. [...] elle le traitait en valet, souvent. (106)
- e. Un soir, pourtant, sa femme le trouva pleurant à chaude larmes, dans leur chambre à coucher. (128)

c. と e. には、単に読みやすさという観点から要求される読点もあるが、それに対し、d. と e. の最後の読点は特に入れる必要がないものである。しかし、これに加えられたことにより、読む際の切れ目が短くなると同時に、souvent や dans leur chambre à coucher の部分とその前の部分と切り離され、それ以前の部分に対する説明を補足する置かれ方となり、かつ際立たされている。

et から句読点に変更したり、句読点の数を増やすことは、このように、文章の持つリズムを変える効果があるが、et から他の語へと変更するとき、また別の効果も認められる。

連載版

- f-1 À deux ou trois reprises, seule avec lui, elle avait de nouveau éclaté en sanglots nerveux, sans savoir pourquoi, ayant du bonheur à pleurer ainsi ; et lui s'était contenté de lui prendre les mains, [...] (3月24日1面)
- g-1 Je ne vais plus dormir en paix maintenant, et, à la première extravagance de ton mari, n'hésite pas, ne t'expose pas davantage... (4月11日1面)

初版

- f-2 À deux ou trois reprises, seule avec lui, elle avait de nouveau éclaté en sanglots nerveux, sans savoir pourquoi, ayant du bonheur à pleurer ainsi. Chaque fois, il s'était contenté de

lui prendre les mains, [...] (143)

g-2 Je ne vais plus dormir en paix maintenant. Entends-tu, à la première extravagance de ton mari, n'hésite pas, ne t'expose pas davantage... (277-278)

f-2 は、f-1 から書きかえられた語によってその前の文を補足する文となる。また、g-2 は、前の文が提起している問題に対する対処をこれから述べるという合図（« Entends-tu »）によって、et でつなぐよりも二つの文の関連性を強めている。接続詞 et は、様々な機能を持ち合わせる便利な言葉ではあるが、繰り返されるとやはり単調になりかねない。それゆえ初版において、この語は極力排され、前後の関係をより明確に表す言葉に変えられていることが認められる。

さらにこの接続詞についてもう一点検討してみたい。et は対称をなす表現において必要な語であるが、『ブラッサン征服』の連載版で多用されていたこの表現は、初版において、対称を成す語のどちらかが削除されている例が120以上にも及んでいる。例えば、「h. les poiriers et les pruniers」（2月24日1面）、「i. à côté des rideaux blancs et discrets」（3月24日1面）、「j. Mme de Condamain allait et venait」（4月2日2面）は、いずれも et 以下の語（et les pruniers, et discrets, et venait）が初版では削除されている。さらに、削除以外の方法がとられているものも少なくない。

連載版

k-1. mais le prêtre [=l'abbé Faujas] raconta gaiement qu'il avait acheté cette soutane dans la journée et qu'il l'avait gardée pour faire plaisir à sa mère, [...]（3月11日1面）

l-1. Olympe [...] était devenue l'amie intime de Rose, à laquelle elle empruntait souvent quarante sous, en s'apercevant de l'oubli de son porte-monnaie et en disant que les deux étages lui faisaient peur.（4月3日2面）

初版

k-2. Mais le prêtre [=l'abbé Faujas] raconta gaiement qu'il avait acheté cette soutane dans la journée. Il la gardait pour faire plaisir à sa mère [...] (90)

l-2. Olympe [...] était devenue l'amie intime de Rose, à laquelle elle empruntait souvent quarante sous, pour ne pas avoir à remonter les deux étages, les jours où elle disait avoir oublié son porte-monnaie. (219)

l-2 は、対称的な構造（この場合は、l-1. の *en s'apercevant* ～と *en disant* ～の組み合わせ）を崩すという、この小説の連載版から初版への書き換えの最も数の多い例の一つであるが、ここで興味深いのは、k-1. の *et que* を削除して文を切り、*Il la gardait* から始まる新たな文を作っている k-2. の例である。これによって、*Il la gardait* 以下の部分が前の文の動詞 *raconta* に従属せず自由間接話法になる。結果、初版で書きなおされた文は、文の構造のみならず話法のレベルでも対称的な関係が解消される。

連載版において支配的であった対称的な構造は、このように、初版において崩される傾向が強い。その方法としては、k-2. や l-2. の他、連載版の直説法を使った表現から現在分詞あるいはジェロンディフ、または前置詞を使った表現への書き換えが目立つところだが、このタイプの書き換えは、初版において60箇所以上にも及ぶ¹⁰。確かに、動詞のいずれかを分詞形にする（例えば « m-1. L'abbé Faujas remercia et promit d'être prudent. »（3月10日1面）を « m-2. L'abbé Faujas remercia, en promettant d'être prudent. »（78）のように書き換える）ことで、同じ法と時制の動詞を繰り返すことによって生み出される対称的關係や単調さを崩すことはできるが、このタイプの書き換えを注意深く見ると興味深い点が浮かび上がってくる。例えば次の三つの例を見てみよう。

連載版

n-1. Pendant qu'il [=l'abbé Faujas] confessait cette dernière [=Marthe], Mme Faujas restait à la porte, et comme elle n'aimait pas à perdre son temps, elle apportait un bas, elle tricotait.

（4月4日1面）

o-1. Marthe lui contait ses chagrins, et parlait au prêtre en belle-mère, qui veut le bonheur de ses enfants et qui passe le temps à mettre la paix dans leur ménage.（4月21日1面）

p-1. Une fureur croissante le [=François] secouait, la grande clarté de l'incendie achevait de l'affoler. Il descendit à deux reprises avec des sauts prodigieux, pour voir si les tas brûlaient bien ; il tournait sur lui-même, traversait l'épaisse fumée, activait de son souffle les brasiers, dans lesquels il rejetait les poignées de charbons ardents qu'il ramassait, et, à la vue des flammes s'élevant déjà à la hauteur du second étage et s'écrasant aux plafonds des pièces, il s'essayait par moments sur le derrière, riant et applaudissant de toute la force de ses mains.（4月24日1面）

初版

n-2. Pendant qu'il [=l'abbé Faujas] confessait cette dernière [=Marthe], madame Faujas restait à la porte. La vieille dame, n'aimant pas à perdre son temps, apportait un bas, qu'elle tricotait. (227)

o-2. Marthe lui ayant conté ses chagrins, elle parla au prêtre en belle-mère voulant le bonheur de ses enfants, passant le temps à mettre la paix dans leur ménage. (346)

p-2. Une fureur croissante le [=François] secouait, la grande clarté de l'incendie achevait de l'affoler. Il descendit à deux reprises avec des sauts prodigieux, tournant sur lui-même, traversant l'épaisse fumée, activant de son souffle les brasiers, dans lesquels il rejetait des poignées de charbons ardents. La vue des flammes s'écrasant déjà aux plafonds des pièces, le faisait asseoir par moments sur le derrière, riant, applaudissant de toute la force de ses mains. (384)

n-2 では、n-1 の半過去の繰り返しによる規則的なリズムが、現在分詞をはさむことによって一旦中断され、さらに「elle tricotait」の部分に「un bas」に関係代名詞を使って従属させ、補足的にしている。それに対して、o-2 は、現在分詞への書き換え例であるとはいえ、この変更によって対称的な構造を崩すことにはならない。それゆえこの変更は他の理由からなされたと考えられるべきであるが、この時、流れるような調子を中断させてしまう関係代名詞を毛嫌いし、文の流れを妨げない現在分詞を好んだフロバール¹¹を思い出させ、ゾラも敬愛する師の好みを受け継いだと考えることもできるかもしれない。

p-2 は、一見、o-2 と同じタイプの関係代名詞から現在分詞への書き換えに見える。p-2. における、p-1. 中の「pour voir si les tas brûlaient bien」、qu'il ramassait、「s'élevant déjà à la hauteur du second étage et」の、おそらくは冗長さの解消や対称性の回避のための削除は別とし、先程から問題にしてきた関係代名詞から現在分詞への書き換えの問題に注目するなら、主節の動詞と同時に行われた行動を半過去で表した p-1. と比べ、現在分詞で表した p-2. の方が、より躍動感が感じられる表現になっている。というのも、p-1. において、フランソワの行動は、前景を描く単純過去と後景を構成あるいはその状況説明となる半過去という、この二つの動詞のよくある組み合わせによって表現され、「il tournait」、「traversait」、「activait」が、「Il descendit」と平行して行われた行動となるのに対し、初版における現在分詞「tournant」、「traversant」、「activant」は、「Il descendit」と同時性を示しているとはいえ、その前に半過去で書かれた状況説明「secouait」と「achevait」と同レベルに置かれないことが、形の上から明白であるゆえに、より主節の動詞と

のつながりが密接であることが瞬時に解され、現在分詞の持つ流動性は、行動の躍動感の表現に生かされている。

以上のような変更は、『ブラッサン征服』の最初から最後までほぼ一貫してなされており、接続詞 *et* を多用することによって文の結びつきを強め、対称をなす構造や表現によって安定した印象を与えていた連載版から、初版ではこれらを削除または変更することにより、より流動的で躍動感あふれる調子を作り出そうとしている。この調子は、これまで検討した点に次いで多い、初版における中断符の加筆（約20箇所）を見る時、一層強くなるだろう。一見些末的にすら思われるこれらの変更は、テキストが読者に与える印象を変えることに大きく貢献している。

Ⅲ. 冗長さと明瞭さ

前章で観た対称性による安定感を与えるような調子は、反復¹²によっても補強される。連載小説は読みやすさが何よりも求められるゆえ、極力多義的な解釈を許さないよう読者を導くため、時として、一度述べられた内容を説明し直したり確認したりする必要があるからだ。また、新しいものが実存的な問題に迫る不安を抱かせるのに対し、見知ったものを再び見出すことが安心感を与えることは、精神分析の説を援用してしばしば言われることである。事実、『ブラッサン征服』、とりわけその連載版には様々なタイプの反復が使われている。例えば「*q. M. Delangre et le docteur Porquier restaient graves et sévères* (3月10日1面)」、*« r. Depuis qu'il [=l'abbé Faujas] était le maître de Plassans, il s'abandonnait, il redevenait sale* (4月18日2面)」のような同義の語句の反復は代表的な例だが、これらに次いで多い反復は、すでに語られた内容の言い換えである。例えば、平穏なムーレ家の家庭風景を描いた第一章の最後で、「*s. et la béatitude de cette table servie dans cette retraite bourgeoise respirait une telle sécurité, que Marthe s'assit, calmée et souriante.* (2月24日2面)」とその光景を要約したり、かいがいしくフォジャスの世話をするマルトとローズの様子を描写した後で、「*t. Le prêtre avait en elles deux servantes soumises, ne rêvant que son bien-être* (4月8日1面)」と説明したりする例である。修辞の観点から、対称性と反復とが無関係ではなく、優れた文体の特徴とされる多彩さを妨げることは、ジョルジュ・モリニエによって指摘されているが¹³、こういった反復は、やはり冗長な印象を与えかねないだろう。なるほど、『ブラッサン征服』の初版において、*q.* と *r.* からは下線部が、*s.* と *t.* は、ともに全体が削除されている。このような例も、この小説全体を通して随所に認められる。

『ブラッサン征服』の初版は、連載版と比べ、反復の削除によってかなり簡潔になった印象を与えているが、さらにこの小説においては、不透明な印象を持続させるためであるかのような削除や書き換えがなされる場合もある。その顕著な例が、僧フォジャスの人物像である。確かにこの僧は、登場した当初から謎めいた人物として描かれてはいるが、連載版と初版では、フォジャ

スがブラッサンへ来た理由やその意図の書かれ方に差がある。それはまず、この僧がブラッサンにおいて重要な地位を占めるようになったきっかけとなる、主任司祭への任命を大司教に願い出る場面に現れる。

連載版

u-1. Comment voulez-vous que Paris protège ouvertement un pauvre diable comme moi, qui est arrivé à Plassans avec une soutane percée et sur lequel courent des infamies? Quand on envoie un homme perdu à un poste dangereux, on lui dit : « Tâche de réussir, et nous te reconnâtrons, nous te laisserons tailler ta part ; jusque là tu ne seras qu'un misérable, que nous renierons pour qu'il ne nous compromette pas. »

Et il sourit amèrement en ajoutant :

- Aidez-moi à réussir, monseigneur, et vous verrez que je suis aimé au ministère.

(3月26日1面)

初版

u-2. Eh! dit-il, oubliez-vous que des infamies courent sur mon compte et que je suis arrivé à Plassans avec une soutane percée! Lorsqu'on envoie un homme perdu à un poste dangereux, on le renie jusqu'au jour du triomphe... Aidez-moi à réussir, monseigneur, vous verrez que j'ai des amis à Paris. (155 – 156)

u-1.において、下線部から、その4行前の「on」を使って表されていた人物が「ministère 内閣」の大臣たちであることが明らかになり、直接話法で示されたフォジヤスに対する命が、政府からのものであることが理解される。それに対し、u-2.の下線部で、「amis」と示された人物が大臣であることは、これよりずっと後、ルスロ大司教がパリに向いた際にフォジヤスの過去を知ったことを、ブラッサンに帰郷後、シュラン神父に語る場面で明かされる。

連載版

v-1. [...] il [=le ministre] l' [=l'abbé Faujas] envoya pourtant ici, à tout hasard, en promettant de lui laisser tailler sa part, s'il réussissait à conquérir la ville... Et Faujas a conquis Plassans... Le ministre a été très-aimable pour moi. (4月15日2面)

初版

v-2. C'est à tout hasard qu'il [=le ministre] l' [=l'abbé Faujas] a envoyé ici... Le ministre s'est

montré très-aimable pour moi. (306)

確かに、『ルーゴン家の運命』の読者なら、ボナパルト派に与してプラッサンにおいて重要な地位についたフェリシテ・ルーゴンとフォジャスとの関係から、この僧の正体には早い段階で気づくとはいえ、『プラッサン征服』の初版においては、この場面で初めてフォジャスの背後にいる人物が明言される。また、v-1. では、u-1. のフォジャスのセリフの中で言われていたこと「*nous te laisserons tailler ta part*」が、ほぼ同じ表現でルスロ神父のせりふの中で繰り返されることによって、フォジャスと大臣との関係の密接さに再び注意が喚起され、さらに、「*Et Faujas a conquis Plassans... Le ministre a été très-aimable pour moi.*」とフォジャスと大臣との間で交わされた約束が実行されたことが確認されてもいる。それに対してv-2. の「*C'est à tout hasard qu'il l'a envoyé ici...*」と「*Le ministre s'est montré très aimable pour moi.*」との文のつながりは、読者の想像力に任されているに過ぎない。連載版において、フォジャスの正体はこの小説が半分も進まないうちに明らかになるのだが、初版では、その正体の提示を遅らせることで、この人物の謎めいた雰囲気（霧を小説の終盤近くまで保たせている。

このようにゾラは、連載版では、反復を利用して、読解の複数性を阻むことで意味の強化を図っているのに対し、初版では、連載版の反復部分を極力削除し、より幅広い意味を持つ語を選び、話の筋道を曖昧にして謎めいた部分を創出することによって読者を惹きつけようとしている。これらの削除や書き換えは、物語の内容を変えるものではないが、読者に与える印象やその興味の引きつけ方を変える大きな要因であるといえよう。

IV. 自主検閲？

『プラッサン征服』の初版は、連載版を削っただけでできたものではない。初版において加筆された部分もいくつか認められる。ただ、この加筆部分の中には、草稿ですでに書かれていたものを復活させただけのものがある。一旦削除したものをなぜまたほとんど語句を変えずに再び採用するのだろうか。該当する部分を挙げて具体的に検討してみる。最初の例は、草稿中で書かれた、フォジャスが町の有力者たちのみならず、庶民の人気も得ることに成功したことを例証するエピソードである。

草稿

- w. [Il s'était fait adorer de ces grandes filles] en leur donnant de petites tapes sur les joues et en leur recommandant d'être bien sages, ce qui mettait des rires sournois sur leurs mines

effrontées. [...] [il] n'était pas rare d'en rencontrer deux, dans les coins sombres des remparts, en train de se gifler, sur la question de décider laquelle des deux monsieur le curé préférait.¹⁴

- x. Et il n'était pas jusqu'au jeunes coquines de l'œuvre de la Vierge qui, au fond des ruelles désertes des remparts, ne jouassent au bouchon avec les apprentis tanneurs du quartier, en célébrant les mérites de M.Delangre.¹⁵

x. が連載版で削除され、また初版でほとんど修正を施さずに復活したのは、w. の削除と復活に連動していると考えられるが、w. が連載版で削除された理由は不可解だ。フォジャスが庶民の人気も得たことはこのエピソード失くしても十分読み取れるが、簡潔にする傾向のある初版で復活させて、同じ内容の反復を厭わない連載版で削除したのはなぜだろうか。この点はもう一例の重要な草稿からの復活部分、この小説の終盤の、マルトがフォジャスに愛の告白をする場面を見る時、ある仮説が立てられる。まずは少々長いが、この場面において、加筆が集中する部分を引用して比べてみる。

草稿

Je vous disais qu'il me semblait dormir, que depuis vingt ans je vivais ainsi, dans mon coin, sans un désir et sans une curiosité. Et c'est vous qui m'avez réveillée avec des paroles qui me retournaient le cœur et qui me faisaient souhaiter je ne sais quelle vie de joie. J'entrais dans une autre jeunesse... Ah! vous ne savez pas quelles jouissances vous m'avez données, dans les commencements! [...] Comprenez donc que je suis lasse de ce désir toujours en éveil, que ce désir m'a brûlée, que ce désir me met à l'agonie. Vous voyez bien que je n'ai plus de santé ; et que j'ai bien mérité de tout goûter, de tout connaître. Il faut même que je me dépêche, si je ne veux pas être dupe... [...]

Vous m'avez promis le ciel, en bas, sur la terrasse, par ces soirées pleines d'étoiles. Moi, j'ai accepté. Je me suis vendue, je me suis livrée. [...]

Quand vous me tenez, je suis faible comme un enfant. La chaleur de vos mains me brûle et m'emplit de lâcheté... Ce serait à recommencer demain ; car je ne puis plus vivre, voyez-vous, et vous ne m'apaisez que pour une heure. [...]

- Écoutez, Ovide, murmura-t-elle, je vous aime, et vous le savez, n'est-ce pas? Je vous ai aimé, Ovide, le jour où vous êtes entré ici... [...] j'étais satisfaite, j'espérais que nous pourrions être heureux un jour, dans une union toute divine... [...] Vous ne pouvez pourtant

pas être cruel jusqu'au bout. Vous avez consenti à tout, vous m'avez permis de vous aimer, d'être à vous seul, d'écarter les obstacles qui nous séparaient. Souvenez-vous, je vous en supplie. [...] mon amour parlait et votre silence répondait. C'est à l'homme que je m'adresse, ce n'est pas au prêtre. [...]

-Je vous aime, Ovide, balbutia-t-elle encore ; secourez-moi.¹⁶

連載版

Je vous disais qu'il me semblait, selon moi, que depuis vingt ans je vivais ainsi, dans mon coin, sans un désir et sans une curiosité. Et c'est vous qui m'avez réveillée avec des paroles qui me retournaient le cœur... Ah! vous ne savez pas quelles joie vous m'avez données, dans les commencements! [...] Vous voyez bien que je n'ai plus de santé. [...]

Vous m'avez promis le ciel, en bas, sur la terrasse, par ces soirées pleines d'étoiles. Moi, j'ai accepté. [...]

Quand vous me tenez, je suis faible comme un enfant. Ce serait à recommencer demain ; car je ne puis plus vivre ainsi, voyez-vous. [...]

- Écoutez, Ovide, murmura-t-elle, je vous aime. Je vous ai aimé le jour où vous êtes entré ici... [...] J'espérais que nous pourrions être heureux un jour, dans une union toute divine... [...] mon regard parlait et votre silence répondait. C'est à l'homme que je m'adresse; [...]

-Ovide, balbutia-t-elle encore, secourez-moi. (4月21日1面)

初版

Je vivais dans mon coin, sans un désir, sans une curiosité. Et c'est vous qui m'avez réveillée avec des paroles qui me retournaient le cœur. C'est vous qui m'avez fait entrer dans une autre jeunesse... Ah! vous ne savez pas quelles jouissances vous me donniez, dans les commencements! [...] Comprenez donc que je suis lasse de ce désir toujours en éveil, que ce désir m'a brûlée, que ce désir me met en agonie. Il faut que je me dépêche, à présent que je n'ai plus de santé ; je ne veux pas être dupe... [...]

Vous m'avez promis le ciel, en bas, sur la terrasse, par ces soirées pleines d'étoiles. Moi, j'ai accepté. Je me suis vendue, je me suis livrée. [...]

Quand vous me tenez, je suis faible comme un enfant. La chaleur de vos mains m'emplit de lâcheté... Ce serait à recommencer demain ; car je ne puis plus vivre, voyez-vous, et vous ne m'apaisez que pour une heure. [...]

- Écoutez, Ovide, murmura-t-elle, je vous aime, et vous le savez, n'est-ce pas? Je vous ai

aimé, Ovide, le jour où vous êtes entré ici... [...] J'étais satisfaite, j'espérais que nous pourrions être heureux un jour, dans une union toute divine... [...] Vous ne pouvez pourtant pas être cruel jusqu'au bout. Vous avez consenti à tout, vous m'avez permis d'être à vous seul, d'écartier les obstacles qui nous séparaient. Souvenez-vous, je vous en supplie. [...] mon amour parlait et votre silence répondait. C'est à l'homme que je m'adresse, ce n'est pas au prêtre. [...]

-Je vous aime, Ovide, balbutia-t-elle encore ; je vous aime, secourez-moi. (350 - 354)

この三つのヴァージョンにおける語の変更を見るなら、草稿からの引用の4行目の *jouissance* は、連載版では *joie*（3行目）に、19行目の *amour* は *regard*（11行目）に変わり、さらに初版では草稿で使われた語が再び採用されている。これらの語の変更から、連載版では愛情、より正確に言うなら性愛のニュアンスを持つ語が避けられていることが認められるが、この傾向は、加筆部分を見る時一層明らかだ。まずは草稿からの引用の6行目（初版からの引用では4 - 5行目）で繰り返される「*ce désir*」、草稿の10行目（初稿の8行目）にある「*Je me suis vendue, je me suis livrée.*」などの性的な欲求や身を委ねることを意味する表現や、草稿の11 - 12行目（初稿の9 - 10行目）「*La chaleur de vos mains me brule et m'emplit de lâcheté...*」のような官能的ともとれる表現が連載版では書かれていない。この一連の書き換えや削除を見る時、『プlassen 征服』の連載発表から三年前、ゾラの『獲物の奪い合い *La Curée*』を襲った、パリ検事局より下された連載中止命令を思い出さずにはいられないだろう。この命令は、この小説のヒロインが、自分の夫よりも年が近い義理の息子と関係を持つ場面が、近親相姦的と判断されたことによって下された。ただ、権力者側からのこの圧力が評判となって、皮肉にも、この小説の書籍版の販売の良い宣伝になったということだ¹⁷。この騒動が示している通り、検閲は、書籍よりも新聞に対してはるかに厳しいこと、発表の中止は、性愛の表現だけでなく、その道徳性をとりわけ問題視する。『プlassen 征服』の場合で言うなら、マルトという既婚の女性が、夫以外の男性、しかも恋愛の対象とはしてはならない人物に愛を告白していることが問題なのだろう。それゆえ、連載版では、「*ce n'est pas au prêtre.*」（草稿20行目、初版18 - 19行目）が削除され、「*Écoutez, Ovide*」（草稿14行目、連載9行目、初稿12行目）以下で繰り返される「*Je vous aime*」が、連載版では、他のヴァージョンのように、文頭のような目立つ場所では使われていないことに説明がつくだろう。

この時、先に引用した女工たちから慕われるフォジャスの様子を描いた一節、いい子にしていなさいよと言ってこの僧が少女たちの頬を軽く叩いたり、彼女たちが、どちらがフォジャスに好かれているかを言い争ってけんかになるという一見他愛もない一節が、ことによると禁じられた恋愛関係を想起させかねないと判断されたことから連載版では削除されたとも考えられないだろう。

うか。確かに、『ルーゴン家の運命』の場合のように、連載版に直接修正を施して初版への指示としているような校正原稿が、『ブラッサン征服』には残されていないため、この削除も、果たしてゾラ自身の指示によるものか、編集者の判断なのかは判断しかねるところだろう。さらに、この一節は、先に述べた通り、削除されたとしても特に物語の流れの理解を妨げるものではないゆえに、単に冗長と判断して削除された可能性も排除できない。しかしながら、とりわけ新聞連載には外的な圧力が働きやすく、連載を発表する側もその圧力を警戒しないわけにはいかないとこの事実を考慮するとき、やはり自主検閲の可能性も皆無とは言えまい。というのもこの連載版の修正や削除が、これまで見てきたことから推測されるゾラが通常とってきた方針と相容れないからだ。つまり、反復は、とりわけ連載版に使われているのだが、この場面においては、むしろ初版に多く使われている。より簡素な表現に書き換えられている初版において、反復が使われることは矛盾するように思われるかもしれないが、この小説における一つの大きな山場であるこの場面で反復表現を多用することは、そのほかの部分に簡潔な表現に抑えられているだけに、この場面が一層際立つたされる。しかしながら、反復が多用されている連載版でこの場面だけが反復の技法が控えめなのは、説明がつきにくい。連載版でこの部分だけ反復を抑えることは、それまで保ってきた調子が損なわれるだけで、簡素になった文体がこの場を盛り上げているとは考えにくい。確かに、フォジャスとマルトが向きあい、感情をぶつけ合うという設定だけでもこの場面は他から際立つのだが、その激しさは、初版の同じ場面と比べると、明らかに抑えられてしまっている。

おわりに

ゾラは確かに、連載という形式が要求する技法の多くを批判した。しかしながら、連載に使われがちな技法として挙げられる直接話法や反復は、使い方によっては、批判的機能を発揮し、芸術的な効果を与えることもできる。ゾラの技法で評価できるのは、このように、小説の発表媒体によって文体を使い分けることができるということだけでなく、連載という一般大衆を読者に想定する場合に適っている形式に好んで使われる技法を、正統的な作品の中で効果的に使用していることだ。この点に、この作家の小説が、大衆的な人気を博しながらも、正統的な文学作品としても認められている理由を見出すことができるだろう。

また、文体は作家の技量や発表媒体のタイプのみならず、検閲という外的な圧力からも影響を受けることを我々は確認した。『ブラッサン征服』の場合、それは連載版においてよからぬ影響を与えたのかもしれないが、圧力を受けてなお輝く文体もあるだろう。事実、検閲ではないが、ゾラが晩年に参加したドレフェス事件においては、この作家の文章は法的に罰せられるという圧力を受けてなお輝いた。外的なさまざまな圧力をも取り込んでますます豊かになる作家のエク

チュールの魅力は、まだ大いに解明の余地が残されている。

註

- 1 『ブラッサン征服』の連載版と初版からの引用は、以下（Émile Zola, *La Conquête de Plassans*, dans *Le Siècle*, 24 février-25 avril 1874. <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k733337k>. Émile Zola, *La Conquête de Plassans*, Charpentier, 1874. <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k58390899>. r=zola+conquete+de+plassans.langFR) からとし、連載版については日付と紙面番号を初版についてはページ番号のみを記す。尚、引用中の下線、鍵括弧内の加筆は、引用者による。
- 2 参照 Émile Zola, « Lettre à Ludvic Halévy », 24 mai 1876, in Émile Zola, *Correspondance*, II, B.H. Bakker (s.l.d.), Les Presses de l'Université de Montréal – Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique, 1980, p. 456.
- 3 参照 Henri Mitterand, « Le Texte », in Zola, *Les Rougon-Macquart*, I, Armand Lanoux (s.l.d.), Gallimard : Bibliothèque de la Pléiade, 1960, p. 1643.
- 4 『ブラッサン征服』に関する先行研究は、ゾラの『ルーゴン＝マッカール叢書』の計画の意図に沿うような、Eléonore Roy-Reverzy, « La passion religieuse : les Goncourt, Zola et la question anticléricale », *Romantisme*, XXX, n° 107, 1^{er} trimestre 2000, pp. 59-70. や David Baguley, « Histoire et fiction dans *La Conquête de Plassans* », *Zola, l'homme-récit. Actes du colloque de Toronto*, Dorothy Speirs, Yannick Portebois et Paul Perron (s.l.d.) *Les Cahiers naturalistes*, 49^e année, Numéro hors série. Société littéraire des Amis d'Émile Zola, 2003, pp. 31-38. などのこの小説の歴史的側面や登場人物の狂気やヒステリーに関する論考が中心であり、文体や作品の構造に関する研究は、ゴンクール『ジェルヴェーゼ夫人』と比較した Jacques Dubois, « Madame Gervaisais et *La Conquête de Plassans* : deux destinées parallèles, deux compositions qui s'opposent », *Les Cahiers naturalistes*, n°s 24-25, 1963, pp. 83-89. や、ジャン＝ルイ・カバネスが、リアリズム小説における生理学的な問題を扱った研究において、マルトの精神状態とこの小説の章立てとの関係を論じた部分 (Jean-Louis Cabanès, *Le Corps et la maladie dans les récits réalistes*. Paris, Klincksieck, 1991, pp. 614-623.) のような興味深い論考があるとはいえ、副次的に触れられたものがほとんどで、数も少ない。
- 5 この点については2014年8月2日、広島大学大学院文学研究科にて行われた、第33回広島大学フランス文学研究会にて発表した。この発表をもとにした論文は、「連載から書籍へ ―連載版『ルーゴン家の運命』(1870-1871)の校正より―」のタイトルで『広島大学フランス文学研究』、第33号に掲載される予定。
- 6 連載小説に関するゾラの一連の批評については、以下を参照のこと。Émile Zola, « Revue

- littéraire », *Le Salut public de Lyon*, 6 février 1865 ; « Correspondance littéraire », *Le Salut publique*, 11 septembre, 1866, in Émile Zola, *Œuvres Complètes*, Cercle du livre précieux, X, 1968. p. 329-336, 617.
- 7 参照 Flaubert, Gustave, « Lettre à Émile Zola », 3 juin 1874, dans Flaubert, *Correspondance IV*, édition établie, présentée et annotée par Jean Bruneau, Gallimard : Bibliothèque de la Pléiade, 1998, p. 805.
- 8 参照 Daniel Cuégnas, *Introduction à la paralittérature*, Seuil, 1992, p. 99.
- 9 この問題に言及した論文（「文体と媒体——ゾラ『恋愛結婚』*Un mariage d'amour*（1867）と『テレーズ・ラカン *Thérèse Raquin*』第二版（1868）からの考察」）は『表現技術研究』第10号、2015年3月発行予定に掲載される見込み。
- 10 この逆のパターンもあるが、その数は3分の1にも届かず、量的に考えるなら、直接話法から現在分詞やジェロンドイフへの書き換えがより重要性を持つことは否めない。
- 11 フロベールが関係代名詞を嫌い、現在分詞を好んだことについては、以下の文献を参照のこと。Albert Thibaudet, « Le Style de Flaubert », dans *Gustave Flaubert*, Gallimard, 1935, p. 221-285.
- 12 大衆小説研究において反復の問題は、間テクスト的な視点からその機能や効果が論じられている。（例えば、Jean-Claude Vareille, *L'Homme masqué, le justicier et le détective*, Presses Universitaires de Lyon, 1989. Daniel Cuégnas, *op. cit.*）拙論では、ゾラの技法に注目するため、テキスト内の語や内容の反復の問題に限定して考える。
- 13 Georges Molinié, « Symétrie », in Michèle Aquien et Georges Molinié, *Dictionnaire de rhétorique et de poétique*, Librairie Générale Française : Pochetèque, 1999, p. 364.
- 14 Émile Zola, *La Conquête de Plassans. Manuscrit autographe et dossier préparatoire*, Bibliothèque nationale, Nouvelles Acquisitions françaises, n° 10280, f° 366. <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8555840h/f281.image.r=conquetes%20de%20plassans.langFR> 初版の該当箇所は、p. 313.
- 15 *Ibid.* f° 377. 初版の該当箇所は、p. 324.
- 16 *Ibid.* f°s 405-410.
- 17 Henri Mitterand, « La Rédaction et la publication », in Zola, *Les Rougon-Macquart*, I, *op. cit.* p. 1578.

Art du roman

La Conquête de Plassans : version feuilleton et la première édition

Akiko MIYAGAWA

[mots-clés : Émile Zola, La Conquête de Plassans, roman-feuilleton, style]

La Conquête de Plassans est souvent cité comme le roman le moins lu des *Rougon-Macquart*. Cependant, il n'a pas déplu aux contemporains de Zola tels Flaubert, Anatole France et même Ferdinand Brunetière, farouche ennemi de l'écrivain. Tous apprécient ce roman où la passion humaine semble être saisie sur le vif. Cette réception favorable pourrait pour une large part, être due au changement du style adopté par Zola lorsqu'il publie la première édition, après correction de la version feuilleton. Ce changement de style est sensible entre autres, au niveau du rythme : Zola remplace par une virgule ou d'autres expressions, la conjonction « et » qu'il emploie plus souvent dans le feuilleton, mais qui lui donne un ton monotone. La suppression et le remplacement des mots et des phrases symétriques ou répétés contribuent également à briser la monotonie. En outre, dans la première édition, Zola divise souvent de longues phrases en deux ou préfère le participe présent à la proposition constituée par le pronom relatif, ce qui rend son style plus concis.

Ajoutée à ces modifications où il est aisé de reconnaître la main de Zola, il en existe une que nous hésitons à attribuer au seul écrivain. Il s'agit des expressions du désir mentionnées dans le manuscrit, mais supprimées dans la version feuilleton, puis réapparues dans la première édition. Sans doute ennuyé par le Parquet qui avait ordonné l'interruption du feuilleton de *La Curée* à cause de la scène suggérant l'amour incestueux, Zola ou son éditeur auraient exercé une autocensure afin d'assurer jusqu'à terme la publication en feuilleton de *La Conquête de Plassans*.

Zola dispose de styles différents selon le support de publication, mais il lui est difficile à résister aux pressions extérieures.